

物語分析とショット分析から見る『たまこラブストーリー』の主題 —彼女が気付いたものとはなにか—

飯島 裕人

一般に若者は他者との関係に悩んでいると言われている。これについて社会学者である大澤真幸は次のように指摘する。本来他者は本質的に異なる存在であるはずなのに、似た価値観をお互い持っているはずだと思込んでいる。ところが、他者性が現れることにより、親しかった関係は簡単に破壊され、また別の似た価値観を持った他者を追い求める。

一方、映像作家である山田尚子も若者の関係を主題とした映画を繰り返し撮っている。山田はインタビューのなかで、他者は分かり合えない存在であるが、それでも伝えなければならないと主張している。そこで本研究は、山田尚子監督の『たまこラブストーリー』の物語分析と映像のショット分析を行うことで、山田の演出と大澤の理論の関係を明らかにすることを目的とした。

山田尚子の『たまこラブストーリー』は、思春期、特に18歳、高校三年生の若者の関係を描出した作品である。主要登場人物の3人、北白川たまこ、常盤みどり、大路もち蔵は幼馴染で、お互い似た感性や価値観を持っていると思っている。それは、3人は毎日のように商店街で過ごしているシーンを繰り返し描くことで示される。ところが、たまこが大路から告白されることによって、たまこは混乱する。しかし、たまこは母親が父親に音声メッセージで返事したということを知り、自分も言わないと気持ちが伝わらないという認識にいたる。そして、たまこは日常過ごしている商店街から飛び出して、普段行かない京都駅まで大路を追いかける。

本研究は、ロバート・マッキーのシーン分析を用いて、物語を映像的に分解し、カメラレンズ表現と身体表現の意味などをひとつひとつ書き出し、映像に明示的に表れる背景と登場人物たちのセリフや行動を解釈し、登場人物たちの内面を書き出していった。

分析の結果、たまこが商店街から京都駅に飛び出し、大路に会いに行くという行動が、たまこの内面の変化であることがわかるような演出になっていることが明らかになった。これは、他者は分かり合えない存在であるが、それでも伝えなければならないという山田の主張と一致する。それに対して大澤は、他者との関わりは重視せず、一人一人の意識が重要であると述べている。

以上から、本研究は、山田の演出は大澤の理論を逆転した構図になっていると結論づけた。

(指導教員 宇陀 則彦)